

令和6年度第1回岩手県生涯学習審議会・岩手県社会教育委員会議 議事録

1 日 時

令和6年7月18日（木）13：30～15：50

2 会 場

サンセール盛岡 1階ダイヤモンド

3 出席者（敬称略）

(1) 委 員

青柳禎久、岩花由紀子（オンライン）、梶田佐知子、菊池省治、佐藤美代子、高橋勝、千葉美佳子、中村利之、半澤久枝、福島朋子、森川静子、吉田洋倫

(2) 事務局

教育局長 菊池芳彦、教育次長兼学校教育室長 坂本美知治、
生涯学習文化財課総括課長 小澤則幸、文化財課長 佐藤淳一、
学校教育室学校教育企画監 伊藤兼士、保健体育課総括課長 中村和平、
県立生涯学習推進センター所長 千葉憲一、県立図書館長 森本晋也、
県立博物館副館長 野崎正隆、県立美術館副館長 多賀聡、野外活動センター所長 高橋弘寿、
生涯学習文化財課主幹兼生涯学習担当課長 小川信子、主任社会教育主事 高橋省一、
主任社会教育主事 佐藤真、社会教育主事 熊谷啓之、主任指導主事 阿部勲寿、
主任社会教育主事 佐々木透、主任指導主事 大沢勝、主任指導主事 長屋敷淳史、

4 会議次第

- (1) 開会
- (2) 挨拶
- (3) 委員紹介
- (4) 事務局紹介
- (5) 会長・議長及び副会長・副議長選出
- (6) 協議
- (7) 閉会

5 協議内容

(1) 令和6年度主要施策について

生涯学習文化財課、学校教育室、保健体育課、県立生涯学習推進センター、県立図書館、県立博物館、県立美術館、県立野外活動センターについて事務局一括説明（内容省略）

—質疑—

【半澤委員】

当法人では放課後児童クラブを運営しており、この夏に県南青少年の家、陸中海岸青少年の家を利用予定である。エアコンが食堂にしかないようだが、暑さ対策はどうなっているか。暑さ指数等で野外活動が制限される際の代替えプログラムやエアコンの設置計画等も含めてお聞きしたい。

【生涯学習文化財課 小澤総括課長】

青少年の家のエアコン設置については、教育委員会で所管しており、教育施設の整備費予算の中で順次進めているところであるが、現段階では計画を示すことはできない。暑さ対策については、主催事業等については、施設の担当職員がその日の天候、気象情報に合わせて適宜プログラムを必要に応じて変更しながら対応する計画としている。プログラムの実施可否については安全最優先で進めている。代替えのプログラムは各施設でそれぞれ準備しており、団体の引率者等とその都度協議の上進めている。

—休憩—

(2) 学校・家庭・地域の連携・協働の推進について

—協議①—

【中村委員（議長）】

各委員においては、事前配付の資料を基に発言の準備をしてきているところ。視点が三つありますので、それを頭に入れながらそれぞれの立場でのご意見を求める。全員から発言を頂くので、お一人2分から3分で進めていく。前半は家庭学習の充実、後半は体験活動の充実についての意見をお願いしたい。

【佐藤委員】

家庭学習を充実させることは非常にいいと思う反面、今の小・中学生そして保護者は非常に忙しいと感じている。

コミュニティ・スクールの話も先ほどあったが、学校のPTA活動等に参加していると、急に降ってきた言葉のようで、保護者としては馴染みのない言葉となっている。普段、小学生も中学生も色々な活動をしているが、実際に一保護者としてどのように学校に関わればよいのか。日々忙しい中、仕事もして、家事もして、子どもには宿題をやらせるのが精一杯という保護者も多い。

今度、部活動が地域移行になると、土日のどちらかは休むことになっていたり、平日の活動は2時間になったりしているのが、クラブチームに行くと、自分が強かった昭和時代の指導方法を続けるコーチ達もいる。そういうところに所属すると、小学校、中学年ぐらいから夜9時までクラブチームの活動をして、そこから家に帰り、お風呂に入ってご飯を食べて、宿題をする暇がないという子どももいる中、「図書館や公民館で学習を」と言われても、なかなか行けない子どもが多いと思う。充実を図っていくのはいいと思うが、子ども達や保護者がどのように思っているか、実態や声をもっと聞いてもらい、実現可能なものにしていただけるといいと思う。

【半澤委員】

家庭学習の充実というところで、当法人の子育て施設に夏休み中に子どもが集まって勉強しているのは伺えるが、自主的ということ、どこまで自主的であるかみたいなのところもあるのかなと思う。

先ほど熱中症のことも話したが、今、クールシェアといって公共施設に行って涼しい所をみんなでシェアするというのも、夏に限ってだがあるのかなと思う。

うちの子が小学校6年生なのだが、町の事業で、寺子屋のチラシが来て、夏休みの学習を見てくださいるところとか、町ではそういった取組も少しずつ始まっているのかなと感じて見ていた。

なかなか担い手や場所などの整備も大変かなと思いつつ、ちょっとずつ始まっているのかなと思っている。

【千葉委員】

一関市立南小学校で地域コーディネーターをしている。学校内の施設の活用に関しては、放課後児童クラブや学童の施設、それから市民センターで、下校した子どもたちが学習をするというイメージで聞いていた。学校でも、子どもの自主性、探求心、やらされるのではなく、やろうという気持ちを起こさせるためにはどうしたらいいかなど、先生方の考えもあると思う。しかし、学校と市民センター、放課後児童クラブとの情報の共有というのはなかなか難しいのかなと考えさせられている。

それから、進んで学習する子どもは何の問題もないと思う。将来大人になったり高校生になったりした時に、地域の方に見守られて一緒にコミュニケーションを取りながらとてもいい環境で学習していた、そういうイメージで大人になっていくと思う。集中できない子どもや、話すのが上手じゃない子ども、不登校である子どもに対しての接し方というのが一番の課題になるのかなと思う。

【岩花委員】

自主学習等自ら行う家庭学習の充実というところで考えてみたが、学校の宿題が今とても多いという風を感じている。学校の宿題が多すぎて、自分のしたい勉強がなかなかできない、というような話も聞いている。自分のしたい勉強を自ら進んでやるという子どももいると思うので、宿題とのバランスというところも、学校では少し考えてもらえたらいいと思った。

小中学校にはタブレットが配付されているので、タブレットの活用方法について、例えば、オンライン授業であったり、授業をアーカイブで配信したりするというようなこともできれば、家に帰って分からなかったところを、もう1回アーカイブを見て、再度復習することもできるのかなと思っていた。タブレットの活用方法も進めてもらいたいと思っている。

【森川委員】

まず、教育振興運動の全県共通課題の一つが家庭学習の充実というのは、基本に立ち返ったのだなと思った。そもそも教育振興運動が発足したのが、この岩手県の学力の低さということだった。当初は学力向上がメインテーマだった。

非常に学力の高い県では、子どもたちが「宿題をやってからじゃないと遊びに行かないんだよ。」という。そのような心構えを親も祖父母も兄弟も、誰もが、まず宿題をやってから行くのだというような機運があるということを知ったことがあり、印象に残っている。

教振は機運を作る、雰囲気を作る、心構えを作っていこうという運動であり、過去の様々な事例がた

くさんある。その中にヒントになることがあるのではないかなということがまず一つある。

もう一つは、子どもたちが自主的に学習するというその場に、例えば高齢者の方の協力はいただけないかなと思っている。一人だけではなかなかだけれども、大人がついていて丸つけとか、あるいはちょっと見守るということぐらいで、だいぶ意欲が変わってくるのではないかなと思っている。

先ほど、ボランティアの登録というのがあったが、例えば団体の登録みたいなのはどうなのかなと思ひ、老人クラブとか地域婦人連絡協議会とか退職校長会、女性退職校長会などの団体が登録し、個人ではなかなかだけれども、団体として登録しておいて、都合のいい方がその学習の場に立ち会うみたいなことはできないものかなという風に思っていた。

【梶田委員】

家の前の公園で遊んでいる子ども達に、学校以外ではどうやって勉強するか聞いてみたが、自分の持っているタブレットという答えがあった。それはどうしてと聞くと、「学校で習った計算の仕方をネットで調べるとすごく詳しく分かるよ。」と言っていて、時代だなと感じた。

どういうところに行って勉強するか聞いたところ、「夏休みなどに図書館に行くと、大きいお兄さんたちが朝早くから夕方まで学習していて、ちょっと入りにくい。」という話をしていた。何人かで行くとうるさいと言われ、図書館から足が遠のいてしまうという話も聞いた。

学校外施設というと、たしかに無いなと思った。みんなで集まって教え合うなどは昔の話で、個々に家庭でやるというのが今の時代なのだなということを把握した。

例えば様々な社会教育施設やいろいろな団体の取組をアナウンスしていただき、そこに子ども達が自由に行けるようになると、大変いい方法だろうと考えている。

【吉田委員】

小学校での話になるが、確かな学力を保障していくためには、やはり家庭学習、宿題というのは現時点では欠かせないものではないかと考えている。授業と連動した家庭学習、授業と連動した宿題というような形で、その日に習ったことの復習につながるような課題を子ども達に出し、それについて学習するというようなことを本校では行っている。これについては、「まなびフェスト」でも、授業と連動した家庭学習の習慣化を図っていくことを示しており、各家庭でも、家庭学習の習慣化に協力していただくことで、学校と家庭と同じ方向性を向いて取り組めるように進めている。

そのためには、やはり教師サイドとして、保護者が子ども達の勉強を見てあげるのに、どのように習ってきたのかがはっきり分かるようなノートを取らせるなど、しっかり指導していかなければならないと思ひ、現在取り組んでいるところ。

学校外の施設を活用するということが、小学校としてイメージできるのは、児童センターや学童の協力・連携というところかなと思う。前任校では、児童センターと話をする機会をもち、連携して進めていたので、そういった協力・連携が小学校では大事になってくるのではないかなと思う。

宿題が多いという件については、これは個人的な考えになるが、一番大事なのは授業の中でしっかり理解させる、覚えさせる、分かった、大丈夫だ、そういう自信をもって帰れるようにすることが一番かなと思うので、それをあえて、まだまだ練習が足りないので、宿題をたくさん出すというようにはならないようにしなくてはと思っていた。

自主学習に関しては、やはり高学年から中学校にかけてということだと思ひますが、よく一人勉強の中で

自分の興味を持ったことをやれと言われる部分もあるが、それよりは、まず基礎・基本になるところを授業と連動させて復習させ、こういう勉強の仕方もあるよっていうことは、力をもった子ども達がチャレンジできるように教えていく場も必要なのかなと。また、図書館などで調べ学習をするようなことなども高学年などはできればいいのかなとイメージしている。

【菊池委員】

授業でしっかりと理解できる、分かったという感覚がなければ、生徒は自分で勉強するという気にはならない。これは高校になっても同じと思っている。そこを一番大事に考え、教員には授業と連動・関連した課題を提示することや、分かる授業ということを中心に話している。

昨日読んだ教育雑誌に、家庭での学習時間が増えれば学力が伸びるかということ、必ずしもそうでもないという記事が載っていた。授業の中できちんとした思考がなされていて、きちんとした考えができた時というのは、家庭学習でやるべきことはかなり削減されるのではないか、だからやはり授業が大切なのだということのようだ。

高校でも、中学校でも、今、探求ということがとても言われている。教科の中で一生懸命深く考えられるようになるということもそうなのだが、教科を横断して考えてみようということも、やはり高校ではかなり言われているので、そのことを意識しながら、学校の授業でしっかりと考えた方ができるといえるのかなと思っている。

最初の話にもあったが、生徒はすごく忙しい。学校から帰る時間がそもそも19時過ぎというようなことでは、ご飯を食べてお風呂に入り寝るまでの時間を考えると2時間家庭学習できればいい。でも、あまり遅い時間に、学校以外、家庭以外の施設が空いているかということ、空いていない。家にいると、スマホやテレビなどの誘惑もあるので、生活全体を見た上で、生徒の時間を作ることができれば助かるなというようなところ。

学校あるいは課外活動として、いわゆるクラブ活動などの時間のあり方を社会全体として、ある程度認識を持ってやらないと、一生懸命やる生徒ほど自分の時間が無くなるという構図になっているような気がする。この自主学習も含めて、施設を利用してきちんとできるようになるように、生活全体を捉え直さなければいけないのかなと思う。余裕がなければ成果が出ないのかなというように思っている。

【青柳委員】

勤務校は特別支援学校なので、一般的な小中高とはやや違う実態のところもあると思うので、その辺りも含めて話をしたいと思う。私の学校の場合、家庭から通ってくる子ども達もいるが、児童養護施設、それから心理治療施設というところから通ってきている生徒が約半数いるところ。家庭学習という部分については、学校とそれらの施設職員との連携が非常に重要となっている。

本校ではないが、寄宿舎のある学校も多くあるので、奇宿舎の場合は寄宿舎指導員の方が放課後の子どもたちの学習を見るということで、これも学校と強い連携がなされているという状況。

学校外、家庭の他で考えると、特別支援学校、それから特別支援学級もだが、子ども達の多くが、特に盛岡地区はサービスが充実している。放課後等デイサービスというものを利用している。

これがあることで、保護者も仕事をもって生活を送られるというような現状があるのかなと思っている。しかし、こういったところで同じように勉強を見てもらうというのはなかなか難しいところもある。

り、従来からある社会福祉法人であったり、NPO 法人であったり、いろいろなところが参入してきていて、共通理解をもって子ども達の家庭学習を見ていただくというのは非常に難しいなと思っているところ。

登録ボランティアの募集の話があったが、特別支援学校で取り組んでいるボランティア養成に関しては、養成講座というものを実施して、登録するかどうかは、それを受講していただいた上で登録するというような形を取っている。

最初から登録となると、ハードルが高いのかなというように思うので、先ほど言われたように、個人での登録というところを作っていくには、学習の機会であるとか、入口を作っていくということも必要なのかなというように感じた。

【高橋委員】

家庭学習の充実ということだが、学習の定着を図る取組では、まず家庭学習の充実は必要だと思っていて、今回教振のテーマとして取り上げたというのは、学校や地域が連携して取り組むテーマとしては非常に取り組みやすいものと思ったところ。学校外の施設を活用しての家庭学習の部分ということで考えると、小学生の場合はある程度受け皿もあるなと思っている。放課後児童クラブや放課後子供教室などの受け皿がある程度設置されているということもあり、十分かどうかは別として受け皿はある。

中学校の場合は、部活動の関係でなかなか早く家に帰る子ども達はそんなに多くないということで、そういった受け皿は、居場所の設定をしている市町村も一部あるが、それ以外のところは小学校に比べるとあまりないだろうと思っている。実際、最近のところと言うと、中学校においては部活動の任意加入が進んできており、奥州市で言うと、中学生の大体 10 パーセントぐらいは部活動に加入をしていない子たちがいる。大規模校であると 100 名弱位いるという状況があり、かなりの子ども達が放課後になるとそのまま自宅に帰る。そして、何をやっているのかと言うと、帰ってゲームをしている。家庭学習をやればいいのだが、そうではないような状況もあって、すぐに帰ってしまう子ども達の場所であったり、そこを受け皿とする部分であったり、今後かなりのニーズが出てくるだろうと思ひ、必要になってくるのではないかなと思っている。小学校、中学校、どちらもそういった場が必要になってくるのだろうと最近思っている。

そういった学校外の場所で家庭学習に取り組めるような場の設定はやはり必要になってくるなと思うし、場を設定しただけでやってくればいいが、やはり人的支援も必要になってくる。そうすると、いろんな予算が関わると結構大変になるので、ボランティアの活用というのも非常に大事なことかなというように思う。

様々に取り組まれていることはあるのだが、県とか市町村単位で、既存の取組に加えて、さらにいろんな受け皿を作っていくことがこれから必要になってくるのではないかと思うし、例えば最近で言うと、NPO 法人との取り組みで、そういった子ども達を受け入れて、学習支援など居場所を作って活動をしている団体も増えてきている。教育委員会とそういった団体との連携、ネットワーク作りなども必要になってくるのかなというように思っている。

【福島委員】

学校の先生方がおっしゃっていたが、学校がここ数年ものすごく変わっている。学習のやり方や ICT 化など、子ども達は既にスマホの中で育っているとともに、学校も ICT 化して、生活状況もこの数年で

大きく変わっている。その状況は押さえつつ家庭内の学習というのを考えていく方が、子ども達にとってより良いものになっていくだろうなというのを感じた。

大学は施設が充実しており、図書館もあるし、グラウンドもあるし、プールもあるし、何でもある。ICT 機器も十分に学生用に用意されている。学生達は、何歩か行けば図書館に学習スペースがあるという状況だが、学生全員がそれをうまく活用して勉強を進めたり、自分たちの将来に向けて進めたりしているかという、それに乗る学生と乗らない学生は極端に分かれる。その乗らない学生のように、家庭もしくは本人の問題で、なかなか外に出られない、何とかしたいけれどもどうにもできないという子ども達を、自主学習の方向にどうやって道筋をつけていくのかということも 1 つ大きな問題かなと思って伺っていた。

【中村委員（議長）】

一通り、各委員から発言をいただいた。教育振興運動というのは 60 年前に始まった運動である。工藤巖さんがアメリカから持ち帰り、岩手県では 5 者の連携として、子どもを中心に、子どもに関わるところが協力して時の課題を解決していく運動として始まった。

当初は、先ほど森川委員からもあったが、岩手県が全国でも学力が低い。これをなんとか全国レベルに上げたいのだが、そのためにはどうしたらいいのか、行政はどうしたらいいのか、地域はどうしたらいいのか、学校はどうしたらいいのか、親はどうしたらいいのかというそれぞれのテーマに従って取り組んだ運動。連携をして取り組んだ。家庭ではまず机を与えよう。勉強する机がないなら机を与えよう。みかん箱だったりリンゴ箱だったりを最初は葛巻町では用意して、机代わりにしてでも勉強させたという話がある。

そのように、時の課題を解決するための運動として取り組まれ、その後、健全育成が中心になって今に至っているわけだが、今、子ども達の状況を見ると、学習内容は非常に多岐にわたっている。そして忙しい。昔のように子どもが家に帰ってくれば親がいるという状況でもない。そのためにはということで、放課後子供教室ができたり、児童センターが子どもを見守ったり、または NPO 法人が子ども達を見たりというように状況はかなり変わってきている。しかし、やはり先程から、各学校の先生方からは、基本はやはり学校であり、学校で学習を十分に理解させたいという話もあった。さらに、それを確かなものにする意味では、家庭での学習もしてもらいたい。家庭だけではなくて、地域にある施設を有効に使うという話があった。大学の場合には非常に学習しやすい環境があることも分かった。

私は盛岡市の社会教育委員をやっていて、その会議の中で、盛岡市立図書館のリニューアルの話があった。高松の池近くにあるリニューアルされた施設で、テーブル・机のある部屋が一番賑わっているのだそうだ。高校の子ども達が来て学習している。静かなところで何か調べようとすれば図書・資料はある。近辺に盛岡第三高校とか、盛岡誠桜高校とか、盛岡第一高校とかあるが、そういう子ども達が多いらしいのだが、そこで学習をしている。

確かに、県立図書館も環境が非常にいい。クーラーも効いていて、いい環境で勉強できるということで、今非常に賑わっているということがあった。環境を整えていくことも学習をさせるためには必要なのかもしれない。支援をしていく体制をどうするかということも必要なのかもしれない。

我々がこれから教育振興運動のテーマとして取り組んで、どういう方法があるのか、どういう情報を提供していけばいいのか、どういう支援体制を講じていけばいいのかということのをこれからの協議の中でまた深めてまいりたい。

そういうことで、最初のテーマの家庭学習の充実については一応ここで終わりにし、次のテーマに入りたいと思う。

—協議②—

【中村委員（議長）】

読書、遊び、お手伝いなどを含む体験活動の充実について、発言をお願いします。

【千葉委員】

体験活動について、私の思っているところでお話ししたいと思う。先ほど話したとおり、私は、学校とそれから地域の大人と PTA のボランティアさんを繋ぐというコーディネーターをしている。このコーディネーターや、ボランティアの皆さんが子ども達に携わりながら、例えば読み聞かせをしていたり、登下校の見守りをしていたりというのがこの体験に当たるのかなと思って聞いていた。

ただ、ボランティアというのは、集めるだけではなく、その後のボランティアの気持ちというか、そういったことが何より大切だなと思っている。ボランティア活動をする地域の大人の皆さんに関して、やっていただくのは本当に助かる場所であるが、ボランティアの皆さんが、やってあげているという気持ちになりかねないということもあり、私個人として、コーディネーターとしては、やはりそこは違うと。子どものためのボランティア活動だということ、子どもの目線で、ぜひそういう気持ちでやっていただきたいという、そういうところの気持ちをすごく大事にしていけたらなと思っている。

こういったところで、資料にある通り、地域の大人が地域の子どもの育てる意識というのもイコール、ボランティアだとすれば、こういったボランティア登録をするだけでなく、登録後の活動参加へのコーディネートだったり、ボランティアに対する講座開催であったり、心の持ちようや意欲醸成であったりということを進めていただければ、とてもいい活動ではないのかなと思っていた。

【佐藤委員】

体験活動の充実のイに「新たな不登校児童生徒の発現の抑制に資することが期待できること」という文については、不登校児童支援の活動をしている仲間なども全国にたくさんいる中で、不登校児童がいるのが悪いという構図があると、不登校のお子さんを持っている親御さんたちはすごく敏感に反応する恐れがある。不登校が発現するとダメなのか、不登校だとダメなのか悪いのかということ。もちろん学校へ通えるのがいいというのは分かるが、そういう価値観ではない保護者も増えてきている。

資料に入っていた文科省の体験活動のところで、親の経済活動、経済状況と体験活動の状況が必ずしも比例していないとは書いてはいるが、チャンス・フォー・チルドレンという公益社団法人の方が、今年の4月18日に講談社から『体験格差』という本を出しているのだが、やはり貧困な家庭は体験ができない、スポ少にも通わせられない、自然活動にも通わせられない、進学にも影響してくるというようなことが書かれているので、経済的に貧困な方たちが体験活動を充実させるっていうのは非常に難しいのではないかなと思っている。

今、私は妊娠中のお母さんたちの支援を普段しているのだが、貧困家庭の連鎖と言うか、親自身が貧

困ったり社会的、知的に低いレベルにあったりと、そういう段階でいつ妊娠したらいいか分からない。だから、社会的、経済的状況が整っていなくても妊娠する。そして、離婚をする。経済的な基盤がない中で読み聞かせなどというものは、自分もしてもらったことがないから、もちろん子どもに本を読むこともしない、夜はとにかくご飯食べさせて寝せればいい方。でもそのまま放置とかという虐待の連鎖っていうのを非常に強く感じている。

やはりこの体験活動というところの読書、遊び、お手伝いというところも、貧困家庭だったり、社会的状況が厳しかったりするご家庭は、多分それが連鎖していくので、こういう体験はとてもいい活動だというのは分かるし、子ども達の生きる力を伸ばしていくのは非常にいいと思う。

ただ、そういうところにチャレンジしてみようという親御さんのハードルを低くするような支援。子どもにチャンスを与えるだけじゃなく、学校の先生なのか、地域の方なのか、ちゃんと親御さんにも寄り添い、こういうところにチャンスがあるのだと、こういうキャンプがあるのだと、金額的にはこうかもしれないけど、こういう支援もあるのだよとか。状況の厳しいご家庭の親への寄り添いというのも非常に大事なのではと思っている。

NPO や民間でもかなりこういう体験活動も色々やられている、活動をやっている団体もたくさんあるので、そういう活用をしていっていただきたいなと思っている。

【半澤委員】

県南青少年の家や陸中海岸青少年の家に毎年行っているが、海に行ったことがないというお子さんが毎年必ずいる。この状況で子ども達を連れていくのは、負担は大きく感じるが、やはり子ども達のためにそういった機会を設けていくということが、うちの児童館、放課後児童クラブでは必要なこと。

それと合わせて放課後子供教室も年5回、矢巾町主催だが、どんなことを子ども達がやりたいと思っているのかを集約して実施している。先日は、けん玉教室をお願いした。子ども達は昔遊びという認識しかなかったが、県南からけん玉の先生をお呼びしたところ、子ども達はやはり夢中になれることがあると、自分で学ぼうという力がすごく発揮された。遠足に行くのもそうだし、あまりなんか手がかからないと言ったら言い方おかしいが、自分で何かを得ようとする力が格段に発揮されるので、やはり体験活動の充実に向けてというのはすごく大事なことかなと思う。

あと、その年齢に応じた活動はやはり必要かなというところがあり、うちの児童館は、1年生から3年生と4年生から6年生に分けて、学校もちょっとお借りしながら活動しているのだが、年齢に応じた興味関心みたいなのも合わせて取り組んでいくというのが一番効果的で、充実した時間、余暇時間になると思う。

子育て講習会というものも合わせて、未就学児、まだ幼稚園にも通わない親子対象にも事業をやっている。ペアレントトレーニングを体験してもらった。子どもの体験活動もそうだが、親自身もそういった体験を通しながら、こう言われると嫌なんだな、親でも大人でも嫌だなとか、こうやって言われると、気持ちよく何でもやれるなっていう気持ちになるという体験ができた。このように、生涯学習として大人の体験活動というところまでやっていけたらいいのかなと思った。

【岩花委員】

久慈市中央市民センターでは、小学生に対しては放課後子供教室を開催しており、その他にも子ども対象の事業も開催している。中学生や高校生に対しては、ボランティア活動を一緒にやってみませんかというようなことで集まってもらっている。

募集する人数に制限もあり、先ほど佐藤委員もおっしゃっていたが、保護者が参加させるという判断をしないと、来られないようなお子さんもいるのかなというようなところは感じている。学校以外のところでの体験活動となると、やはり保護者の同意というのは必要になってくるのかなと感じていた。

学校での体験というのであれば、色々な活動を体験できるのかなと思うが、なかなか、学校も、勉強で忙しいため、他の体験活動に時間を割けないというのも分かるし、学校以外の体験活動の難しさを感じている。

朝学習などにおいて、読み聞かせで学校に行ったこともあるが、ちょっと外に出かけるのはできないかなとは思いますが、読書に関する体験活動というのであれば、そういった時間を活用してできるのかなと感じている。

【森川委員】

教振で、これを全県共通課題にするというところが非常に嬉しいなと思った。読書とかお手伝いなどは課題として挙げられたこともあったと思うが、体験活動の充実と言ってくださったのは、もしかしてあまりなかったような気がしている。

自然体験のことについて重点的にお話ししたいのだが、青少年の家や野外活動センターなどの施設を使うのは本当にいいなと思う。安全であり、動植物のことや有事の際の対応など様々あると思うが、それら全てについて検討しており、社会教育主事が在籍しているということ、40年以上の積み重ねがあることなども安心材料。防災についてもテーマに挙げて取り組んでおり、非常にノウハウを持っているということがある。

資料で、「子どもの頃の体験が、将来の健やかな成長を確かなものにするために必要な要素であることが見えてきました。」とあるが、だいぶ前から文科省が追跡調査もしており、一時は高齢者に追跡したことがあり、「幸せですか?」「やる気がありますか?」とか、様々なコミュニケーションの力があるかとか、様々な調査をした結果、体験は幸せな未来に結びついているということは明らかで、体験がいかに必要なものかという事は分かっている話である。

それに加えて、青少年の家の利用満足度はほぼ100パーセント。青少年の家に行けば満足して帰ってこられる、というようなことも調査から分かっているということもある。施設の利用料が安いというのもみんなに平等に体験活動を提供できる可能性がある。

このプランにおける取組の周知・啓発に力を入れられるのであれば、もっともっと健全育成のために力を尽くせるのではないかな、教振が役に立っていくのではないかなというように感じた。

【吉田委員】

小学校の立場からになるが、まさにこの体験活動の充実に関しては、小学校では本当にそのものかなという風に感じている。

現任校の様子を見ても、読書、遊び、お手伝いもある。読書に関しては、朝、ボランティアの方が来て読み聞かせをしてくれる曜日もある。そういったところで本に親しむことができるし、昼の放送の中

で読み聞かせをすることもある。また、読書月間があり、図書委員が中心になって呼び掛けたり、目標冊数を決めて読書に取り組んでいたりと、そういったところも充実している。

遊びに関しては、本校では縦割班があるので、1年生から6年生が混ざった班で遊ぶ日があり、高学年が「今日はこういうことして遊ぼうね。」ということで、低学年も一緒に楽しめる内容を考えて遊んだり、全校遊びの日ということで体育委員会が主導して全校鬼ごっこなどで楽しむということをやったりしていた。日々の遊びの中でも、本校では各学年男女の仲もとても良くて、男の子、女の子混ざって鬼ごっこしたり、ブランコをかわりばんこにやっていたり、高学年であれば、体育館ではバスケットボールやドッジボール、外ではサッカーを男女混ざって、6年生でも女の子も混ざってサッカーをしていたり、それにプラスして担任の先生も混ざって一緒にやっていたりとか、そういったところで、いい形の様子が見えるかなと思っている。

学校の中では、お手伝いとは言わないが、仕事のところで、各学級での係活動があったり、当番活動があったり、児童会の委員会活動があったりと。本校では、VS 活動というような名称でのボランティアサービス活動、自分で気づいたみんなのためになることを自主的にやろうというボランティア的な活動を行う習慣があり、そういったところで子ども達は様々な活動を体験、経験することができている。

もっと広く捉えれば、子ども達が担任の先生と一緒に学んでいる授業自体も体験そのものではないと感じるところがあるが、そういった意味からしても、小学校的にはこの体験活動の充実というのを入れているのは、様々なことができているのかなというようなことで、ありがたいなと思っている。

前任校では、「まなびフェスト」の中で、「学校でも読書に取り組むので、各家庭でも読書をよろしくお願いします」、「家庭の中でのお仕事もぜひ与えてやってください」というような呼びかけをして、一緒になって子ども達を伸ばしていこうというようなことができた時もあったので、そういった形で連携しながら、一緒に取り組むことが可能なのではないかなと感じている。

【高橋委員】

この体験活動の充実というのは、現代的な教育の部分で言うと非常に大きな課題であって、非常に重要なテーマだなと感じている。現在の社会全体を見てみると、バーチャルな世界が普及しており、日常においても ICT がどんどん入ってきて、すごくいいこともある一方で体験を伴わない学習ということも見えたりするということで、そのことによって子ども達が体験不足に陥ってしまっているところでは否めないと感じており、そのことによって多くの身につけるべき資質や能力が十分に身につけているのかなと疑問に思うこともある。

同時にここ数年では、学校現場においては体験的な行事や活動がかなり制限されてきたこともあり、体験不足が、コロナの影響によって随分と拍車がかかったという実感はある。

今年度はだいぶ改善はされてきて、コロナ前の状況に戻ってきてはいるが、活動の制限は影響が大きかったと実感としてある。

体験活動の充実の部分で言うと、体験させる活動の中核的役割を担うのは学校だろうなと思っている。学校が、様々な意図的に体験活動を組み込んだ行事や教育活動を、アフターコロナにふさわしいような、そういった活動を再構築していくことは、今求められているのかなと思っている。

全てコロナ前に戻す必要はないと思うのだが、十分に体験的な活動ができなかったところがあるの

で、その部分の積み残しであったり伸ばせなかったりしたところを、どういった意図を持って育てていくかという視点は、大事になってくるかなというように思っている。

県や市町村の教育委員会においても、このことは非常に重要なことだと思うので、各学校に対しては、そのことについて周知、指導、助言をしていくことが必要かなというように思っている。

学校が中核的な部分と思うが、豊かな体験ができるような活動というのが、いろんな部署から企画やイベントが出てくるといいなと思っている。

小学校の場合は、放課後子供教室をはじめ、様々な子どもの受け皿の部分で体験的な学習などを工夫することも考えられる。また、地区行事など、様々なところとの連動もあるのではないかなと思う。

中学生は忙しいが、先ほども話したように、部活未加入の子ども達は時間を持て余している場合も多いので、そういった部分の受け皿も必要になってくると思う。土日にイベントをやった場合、部活動においては金曜日、土日のどちらか1日休むことになっているので、部活の無い日は対応できるのかなとも思う。また、魅力のある活動やイベントであれば、ついてくる子ども達もいると思うので、いい企画を期待したいなと思う。

【菊池委員】

高校については、主に進路に関わる体験が多く行われている。前任校の例だが、町内にいる方にどんどん学校に入ってきていただいて、学校と一緒に進路について生徒が今後どのように学んだらいいのかなどを話し合いながら進めていく。それをしたうえで、さらに地域の職場に伺ってインターンシップということで、やはり非常に大きな体験を生徒にさせることができた。

また、その体験をきっかけにして実際に町の方へも出向いて行ったり、小中学校にボランティアで行ったりして活動を広げたこともあった。それを文化祭で発表するなど、生徒の意識も変わってきているなということも感じた。現任校においても、学校運営協議会の方からも「ボランティア活動がコロナでずっとこれまでできなかったが、以前は結構やっていたんですよ。」という話も伺っているので、これから生徒を外に出していきたいと考えている。体験活動をより充実させていくということで、様々な経験の場を設定していきたいと考えている。

【青柳委員】

体験活動の充実については、従来から特別支援教育では非常に大切にしているところ。ここに書いているような体験活動については、全て私も学校の教員として子ども達と一緒に経験してきたということが一つ一つ思い出される。

障がいがあることで、なかなかそういう経験の機会がない、少ない子ども達が多くいた。例えば校外学習で公共的な施設、機関を利用するというような話をすると、保護者からは、「行ったことがないです。」と返されることが多かった。その「行ったことがない」「経験したことがない」ことを学校教育の中で体験を拡大させて、それを家庭に返していく。そして、「お子さんはこういう様子でしたよ」「こういう風な形で利用できましたよ」と体験の様子を伝えることで、家庭でも行ってみようかなとなっていくという、そのような経験が非常に多かったなと思っている。

特に知的障がいの場合だと、座学よりもそういう体験を通して学んでいく機会というのが非常に有効な学習集団となっているので、この部分については学校で従来から取り組んでおり、生涯学習という部分では、そういう子たちが学校を卒業しても色々な場で体験ができる場所というのはぜひ増えてい

くといいなと思っている。

不登校の話もでていますが、実は、本校の児童生徒は不登校を経験してきた子ども達が少なくない。そのため、中学生になってもほとんど校外学習に行ったことがない生徒もいた。本校で初めて校外学習に出るという時には、バスに乗るというところから非常に緊張していたが、教員たちが非常に丁寧に段階的に事前学習を組んだことで、本人が校外学習を体験できて非常に喜んでいただけがあった。

また、中学校からほとんど学校に行かなかった高等部3年生の生徒は、校外学習に行くことを前の日まで非常に楽しみにして、行きたい気持ちはすごくあったが、結局、当日行けなかったというようなことがあった。こういう子ども達はそのような失敗経験をすごく多くしてきているので、「行けなかった」で終わらせてほしくないと思い、行けなかったではなく、他の友達が行ってきた様子を写真やいろんな形で振り返って、追体験するというような形で、本人の中に少しでもそういう感覚を持たせたかったなということもあった。

不登校を経験している子ども達は、なかなか実際に体験することがすぐにはできないこともあると思うので、いわゆる本体験だけではなくて、追体験や疑似体験など、様々な手段で段階的に進め、本当の体験に繋げていくというような視点も必要ではないかなと思っている。

【梶田委員】

各委員の様々な話を聞き、体験というものの中身は実に様々あるということ、基本はやっぱり家庭にありその影響がたぐさあるのだなということ強く感じた。親の考え方、親の経済力、親の職業などによってその子どもが受ける体験というのが変わっていくということ。

私は鍵っ子のはしりだったので、首に鍵をぶら下げて学校に行き、家に帰ってくると、洗濯物をたたんでしまうということをお手伝いではなくて、家族の一員、家を上手に回すための歯車の1つとして、そういうことをしてきた。

両親は教員であり、朝は早く出て行って夜遅く帰ってくる、土・日曜日も学校行事があったり、学校の生徒さんが遊びに来たりするので、私は家を出て図書館に行ったり、市民センターの談話室で友達と時間を過ごしたりするようになったのだが、そうなってくると、やはり同じような子ども達がそこに集まってきて、その子ども達同士で遊ぶようになったのだが、私はそれが不幸だとは思わないで、その中で、図書館に行くとかすごい読書をする子、将棋の上手な子などがいて、そういう子たちってというのが、大人になっても、そういう職について、いろんなことを考える、人の上に立って指導する人たちになってきていたのだなと、そういう人たちと私は一緒に遊んでいたのだなということに感謝した。

いろんな体験あるが、家庭の中で、子どものたくさんいるところのお兄ちゃんも縦割りの仕組みを学ぶだろうし、一人っ子は外に出て遊ぶ友達を作る、またタブレットを相手にするなど、いろんなことがあるかもしれないが、親は自分がどういう風に子どもに接していいかということをしっかり考えること、それが、子ども達の体験活動の充実に繋がるのだということを感じた。

【福島委員】

色々な委員の方のお話を伺っていて、本当に体験活動はいろんなことがあるなという風に思ってお聞きしていた。

その時に、岩手県の子ども達で、コロナの影響を踏まえて、一体どんな活動が今足りないのかを把握してプログラムを組んだらいいのではないかなと感じた。また、体験活動のプログラムの充実というと

ころでは、せっかく岩手県には色々な地域があり、色々な伝統があるので、その伝統行事の継承を含めた、そういう体験もプログラムに入ってくるといいなと思った。

【中村委員（議長）】

一人一人意見をいただいた。言い足りなかった部分については、後で生涯学習文化財課にお伝えいただいても結構だと思う。いずれ家庭の役割が大切だということ。親が子どもをどう理解して体験活動をさせ、子どもの意欲をどう見ているのかということなどが話題になったと思う。

タブレットやスマホの話題も出たが、家に帰ればそればかりやっている子どももいる。育てた子どもが将来どういう大人になり、子どもを作った時に、その子どもにどう指導していくのかということになると、やっぱり問題が出てくるのではないのか。将来を担う子ども達をいかに育てていくのかということが大きなテーマなので、文部科学省がこの必要性、大切さをチラシに作って提供しているわけだが、これが親達まで十分に提供されて理解されていくことが1つ大きな課題だと思う。

それは学校なり地域なりの責任なのかもしれないが、いずれそれらをどうやって提供していくのかということをやっぱりこれから考えていかなければならない、情報提供をどうしていくのかということを考えていかなければならないだろうと思う。

支援にあたる我々が、支援の仕方について考えていきたいものである。

以上で協議を終了したいと思う。